



9 大学図書館に期待するもの

著者	寺門 臨太郎
内容記述	研修：平成30年度大学図書館職員長期研修 主催：筑波大学 期間：平成30年7月2日～7月13日 会場：筑波大学春日エリア情報メディアユニオン2階情報メディアホール等
発行年	2018-07
URL	http://hdl.handle.net/2241/00153256

大学図書館に期待するもの

寺門 臨太郎

筑波大学 芸術系 准教授

[西洋美術史／ミュージアム・スタディーズ]

●講義の趣旨

講師の専門分野である美術史（学）Art History は、ひろく「美術」ないし「芸術」たるものを対象に据えて実証的な考察を加え、それぞれの対象を時間軸のうえに位置づけて美術の歴史 History of Art というストーリーに組みなおすことを目的とするものであり、またその手段でもある。人が人の手により人自身のために意識的に作りだした「かたちあるもの」の一部を、人は「美術（品）」と呼び、美的鑑賞の対象にしている。往時なんらかの目的と機能によって作られた「もの」は、鑑賞対象となるや元来の機能から解放される一方、近代的な制度としての「美術」の枠組みに押し込められ、鑑賞という行為の具となることに甘んじ、本来の至高性ないし主体性を喪失しているようにみえる。また、そのとき美術史研究者は研究の名の下に「もの」の至高性ないし主体性を無意識のうちに忽せにしてやまいか。この講義では、元美術館学芸員である美術史研究者の講師が、美術史研究の方法論と実践にからめて自身の経験に即し、「もの」の至高性ないし主体性を軸に据え、いわゆる MLA 連携を意識しながら大学図書館に望むものを語る。

●講義の構成

1. 美術史（学） Art History と美術の歴史 History of Art の方法
 - (1) 「美術」という制度と「作品」
 - (2) 「傑作」への投資
 - (3) 「もの」としての美術作品の至高性、あるいは「もの」が主張する主体性
 - (4) 米国ウィリアムズ・カレッジの教育研究環境
2. 美術史研究者がつくられる環境
 - (1) ふたつの美術史
 - ・大学での美術史の研究と美術館での美術史の実践
 - (2) 愛知芸術文化センター
 - ・愛知県美術館
 - ・愛知県文化情報センター・アートライブラリー
3. 大学図書館に期待するもの
 - (1) 知のショールームとしての大学ミュージアムと
オーソライズされたミュージアム組織をもたない筑波大学の知
 - (2) (机上の) MLA 連携議論
 - (3) 筑波大学体芸図書館で「もの」と図書館の至高性あるいは主体性を問う